經濟論叢

第六十二卷・第四號

生産力の主體について……吉村達次

消費者活動と企業者活動(下)……森嶋通夫

京都大學經濟學會

生産力の主體について

吉村達次

一

戰時中近代戰力確保の基礎的前提條件としての生産力擴充政策が、封建的權力機構を極度に利用しつゝ、平和産業の犠牲による軍需工業への總動員といふ名の下に、實は大資本による中小工業の收奪を强力に推し進めつゝあつた時、所謂生産力理論が日本資本主義の合理的再編成の立場に卽しつゝ、これら諸政策の非近代性非合理性の側面に對する鋭い批判の武器として採り上げられた。この理論の核心は生産力の一因子たる勞働力の合理的培養をもつて生産力發展の主體的條件とし、且それを資本主義に內在的な必然的要請であるとすることによつて、前資本主義的殘存物に對する批判者として現はれるところにあつた。その限りこの理論は一應の科學性を主張し得たのであつた。

ところが敗戰と共に、荒廢に歸した日本經濟再建の基抵として生産力の問題は再び採り上げられたのであるが客觀情勢は旣に根本的に變化してをり、それと共に又生産力維持發展の條件も根本的に變化をきたした。戰時中生産力擴充の槓杆となつたインフレ政策は、戰後においては激しい勞働攻勢の波を避けながら、しかも戰時中に

被つた莫大な資本の減耗を回復するために資本が採り得る唯一の强力な武器として積極的に利用せられるに到つたのであるが、それは不可避的に生産力の未曾有の破壞をもたらすことによつてのみ行ひ得るところのものであつた。このインフレの進行に伴ふ生産力破壞は、惡循環的に生産關係の危機を一層激化せしめ、この危機の克服なしには生産力の恢復は誰の目にも最早不可能なものとして反映するに至つて、勞働階級の自覺は彼等の主導による生産管理生産復興會議としてあらはれる迄に躍進せざるを得なかつた。少くとも我國に於ては戰後始めてあらはれたこのやうな現象は單なる生産力の一要素としての勞働力といふ限界を突破して、新しき時代の歷史的主體たることによつて同時に生産力の最大の主體とならねばならないといふ自覺に迄勞働者の意識が發展したことを示すものと云はねばならない。このやうな現實に直面するとき、單なる生産力の一要素としての勞働力の合理的培養をもつて生産力論の中心に据える考へ方が新たな現實を理解するに不充分であらうことは想像にかたくない。從つて我々は眼前の事實から與へられる問題意識に導かれつゝ、生産力理論の再檢討を必要とするのである。

生産力の問題は常に生産關係との關聯において考察されねばならないことは云ふ迄もない。更にこの兩者は生産關係を形式とし生産力をその內容とするところの形式と內容との相互滲透の法則によつて辯證法的に把握されなければならないとし、機械論的方法に對して辯證法的方法が强調せられてゐることも周知の事實である。しかし問題は更に一歩進んで、そのやうな形式と內容の辯證法的關係が生産力と生産關係の統一たる生産樣式の內部において如何に具體化されてゐるかといふことでなければならない。この點についても既にマルクスの殘した諸斷片を中心として多くの研究がなされてをり多岐な議論もあらはれてゐるのであるが、この小論も資本論第一卷

第五章を中心としてこの問題に近づかんとする一つの貧しい試みにすぎない。

二

生産力の最も一般的規定は普通『資本論』における次の言葉によつて理解せられてゐる。

「生産力なるものは、もちろん常に有用的具體的な勞働の生産力であつて、實はたゞ與へられた時間内における合目的的生産的な活動の作用度のみを規定するのである。」（資本論第一卷第一章長谷部第一分册譯一九五頁）

すなはち、與へられた勞働時間内に有用的勞働がどれだけの使用價値を生産するかといふことが、生産力を規定するといふのである。このやうに生産物の使用價値の質と量とにおいてのみ自己を表現するところの勞働の生産力は、この規定の限りでは、單に人間と自然との物質代謝過程における人間勞働の自然的機能を意味するものでしかない。たとへそれが「多様な事情によつて、なかんづく、勞働者の熟練の平均度科學及びその技術學的な應用可能性の發展段階、生産過程の社會的結合、諸生産手段の範圍及び作用能力によつて、また自然的諸事情によつて規定されてゐる。」（同上　一八三頁）としても、これらの諸事情はその現實の發現においては、すべて一個の自然力としての勞働力及び自然的物質としての生産手段に凝結されて現れ、從つてその結果たる生産物も使用價値としての物質以外のものではない。だからマルクスはこの意味での生産力の變動は、勞働の一定の社會的關係の表現たる價値の變動とは絶對的に無關係であると云つてゐるのである。價値の變動が生産力の變動に逆比例の關係を示すといふことも、この生産力の規定の範圍内では兩者は單に現象的にそのやうな關係に立つといふにすぎないのであつて、生産力の變動と價値の變動との間には直接的因果關係があるといふのではない。兩者の因

果的說明のためには、尙多くの社會的條件を必要とするのであつて、それなしには生産力の變動が如何にして價値の變動に結果するかを說明することは出來ない。

元來この規定は、商品の交換價値の物材的擔ひ手たる使用價値の量的變動を制約するものとしての生産力が問題たる限り與へられた生産力の最も單純な規定であり、その限りでは充分な規定であるが、そこから直接に社會において機能する生産力の內的意味を導き出すことは出來ない。このやうな規定の範圍內で何らか現實の生産力を說明しやうとするならば、單なる現象的分析以上に進み得ないことは當然である。

ところで、生産力が問題とされるのは、マルクスの次の有名な一句に明かな如くそれが生産關係との關聯において後者の內容をなすといふところにあつた。すなはち「人々はその生活の社會的生産において、特定の、必然的な彼等の意志に依存せざる諸關係を結び、この生産關係は、彼等の物質的生産力の特定の發展段階に照應するものである。」（經濟學批判の序說　マルエン全集第七卷四一五頁）このやうに生産力と生産關係は相互に緊密な照應關係に立ち生産關係を規定するといふのであるが、かゝるものとしての生産力こそマルクスが問題としてゐるところであつて、從つてそれは單に使用價値の變動を制約するにすぎないやうな生産力であつてはならない。かへつてそのやうなものを現象形態としながら、その本質において生産關係を自己に照應して絕えず再生産し發展せしめる原動力としての生産力でなければならない。それは生産力をその靜止せる現象においてではなく常に運動する本質において把握することでなくはならないであらう。

三

マルクスは『資本論』第一卷第五章勞働過程の分析において、この過程の最も單純な諸契機として、「合目的的な活動あるひは勞働そのものそれの對象及びそれの手段」の三つを擧げ、勞働手段の使用及び創造をもつて、人間に獨自な勞働過程を性格づけるものとしてゐる。勞働手段は生れながらにして勞働の生產物たる性格を有し人間によつてのみ創造せられた第二の自然であつて、自然をして自然と戰ばしめる人間理性の狡智の最も秀れた創造物である。だから勞働手段は人間の自然に對する能動的作用を客觀化した「人間のもの」となつた自然であり、その意味で「人間勞働力發展の測度器」であるばかりでなく、そのうちで行はれる社會的諸關係の指示器でもある。マルクスが他の箇所（賃勞働と資本 マルエン全集第四卷六八〇頁）で「生產力＝生產手段（生產機關）」といつてゐるのも、就中勞働手段のこのやうな特質によるのである。このやうに勞働手段は勞働過程の嚮導者たる限りではこの過程の特殊性を確定するところの指示器であるけれども、しかしながら勞働手段といひ勞働對象といつても、それ自體としては自然物質としての「或る使用價値」であり、その使用價値が勞働過程において行ふ一定の機能によつて、或ひはそこにおいて占める位置によつて、勞働手段または勞働對象といふ形態規定においてあらはれるにすぎない。すなはちこの形態規定は、夫々の使用價値が生ける勞働主體によつてその嚮導者として使用されるか又はその勞働の表現される材料として使用されるかによつて、與へられるものであるから、それらは最早生きた勞働の對象的諸要因としてのみ機能するのであり、生きた勞働に對して受動的な自然物にすぎない。そこでは例へば勞働手段が人間の最も秀れた創造物であるといふやうなことはどうでもよいことであつて、たゞ勞働手段とし

て機能するといふことのみが問題なのであるかくて勞働過程においては、生きた勞働のみが過程の唯一の主體又は主人として振舞ふのであつて、過程はこの主人の行動と共に始まりその停止と共に終るのである。

このやうな勞働過程の諸契機の形態規定の特質はマルクスによれば次の如くである。「それらは生産過程の一切の歴史的並びに特殊の社會的性質から獨立しており、生産過程のあらゆる發展形態に對して平等に妥當するところの規定であり、それは事實上、純粹に動物的な性質から脱却した限りでの人間勞働一般の絶對的規定である。」（マルクス遺稿「直接的生産過程の諸結果」三一頁）勞働主體が動物から區別されるのは、その活動の形式が自然に對する單なる順應ではなくして、始めに觀念的に頭にうかんでゐた表象を結果において實現するところの合目的的計畫的活動たる點にあるが、この目的の實現のためには、目的が單に頭の中に表象として浮んでゐるといふことだけでは充分ではない。目的への意志の從屬といふかたちで目的が意志の發現形式をなし、勞働主體の物質的能力に轉化した限り人間の活動をして「本來の勞働」（自然辨證法　岩波文庫譯上卷一七六頁）たらしめるのである。この目的表象の物質力への轉化を保證するものが、勞働手段である。自己の勞働の嚮導者たる勞働手段に對する客觀的認識を通じて、意志は主觀的觀念的なそれから、客觀的に合目的的計畫的な勞働能力すなはち技能となるのであるが、この技能の獲得によつて始めて、人間は單なる盲目的自然力としてではなく、獨自的な計畫的活動を行ふところのより高次の自然力として、主體的に活動し得るのである。

しかし他面において、勞働過程における勞働はあくまで自然力としての人間の活動であり、自己の身體的自然に拘束されてゐるのであるから、その獨自的な計畫的活動といふのもその身體的自然力の作用範圍たる勞働過程の內部においてのみ云ひ得ることである。從つて勞働過程は主人としての生ける勞働自身の個別的過程たらざる

を得ないが故に、この過程の絶えざる反復再生産の諸條件はこのやうなものとして眺めた限りでの勞働過程の內部からは生じ得ない。社會的再生産から見るならば、このやうな勞働過程はなほ抽象的一面的といはねばならない。生産一般が本來社會における個人の生産であるならば、それ自體再生産の可能性を有し、社會的生産たる意味を有するところの、個別的生産こそ、眞に具體的な「生産する個人」でなくてはならない。（經濟學批判序論三八四頁）

先に引用した勞働過程の三契機を說明したのち、マルクスは次のやうに云つてゐる。

「もしひとが、この全過程（勞働過程―引用者）をその成果たる生産物の立場から說明するならば、勞働手段と勞働對象とは共に生産手段として現象し、そして勞働そのものは生産的勞働として現象する。」

こゝで先づ問題となるのは「生産物の立場」といふことである。生産物は何よりも勞働過程において何らかの形態變化を與へられた「自然的なもの」であるが、同時に過程の始めにあたつてすでに勞働者の表象のうちに觀念的に存在してゐた目的が、この「自然的なもの」のうちに實現したものである。だから生産物は單なる自然物ではなく、合目的的に人間のためのものとなつた自然物でもある。しからばこの合目的性とは何であらうか。

「人間は意識により、宗教により、その他勝手なものによつて、動物から區別され得る。だが人間自身は、彼等で、生活手段を生産し始めるや否や、自分を動物から區別し始める。この生産たるや、人間の肉體的組織によつて制約されてゐる一行爲である。人間は彼等の生活手段を生産することによつて、間接に彼等の物質的生活自體を生産する。」（ドイツイデオロギー　ナウ唯研譯九頁）すなはち生産は本源的には生物有機體としての人間の生命維持のための生活手段を生産することに外ならない。從つて生産物の使用價値は、本源的にはこの生活手段としての使用價値であつて、直接に個人の再生産のために消費されるか、或ひは勞働の生活手段として生産的に消費されるか、いづれ

にせよ消費されねばならない。「消費において始めて生産物は、單なる自然物と異る生産物としての自己を立證し生産物となるのである。」（經濟學批判序論三九一頁）從つて生産物は兎に角、「消費のために完成された一つの形態」をとらなければならない。これが生産物の本源的合目的性である。

ところで勞働過程にとつては、過程の始めに當つて觀念的に與へられた目的は生産物が生産され終ると共に對象化したのであつて、その對象化と同時に勞働過程はその使命を完了したのである。だから過程が終了した後にその成果たる生産物が如何に消費されるかは、勞働過程の關知するところではない。他方勞働過程が終了するや否や、生産物は遊離されて獨立の實體となる。すなはち勞働手段又は勞働對象としての自然物は勞働過程の內部にあつては生ける勞働に從屬してゐたのであるが、今や過程は終り勞働は生ける勞働の肉體から離れて生産物に對象化されてゐるのであるから、生産物は生ける勞働の活動範圍の外に出たのである。のみならず生産物を手に取つて見ても、それが如何なる勞働過程の結果であるか分らない。「勞働過程は生産物においては消失し」てしまひ生産物はたゞ消費のために豫定された使用價値としてのみ存在する。このやうなのが勞働過程の結果として現はれた「生産物の立場」であり、こゝから生産物の、獨自の、勞働過程から相對的に獨立した、運動が始まる。

生産物の運動の終局は、それが消費のために完成された生活手段たる限り、何らかの消費でなければならない。その中間に分配流通の過程が必然的に入つて來なければならないことは勿論であるが、その點はしばらく措き、その到達點たる消費のみを問題としよう。既に述べたやうに「生産物は消費において始めて最後の完成を得る。」消費されない生産物は、まだ可能性としての生産物であつて、現實の生産物ではない。從つて生産物の立場は必然的に消費を含むのであるが、この消費は、前に述べたやうに、勞働過程から獨立した一行爲であるから、

生産物は勞働過程と消費過程といふ二つの夫々獨立した過程の終局點であると共に出發點でもある。

次に生産物のこの二側面の相互制約性を『經濟學批判』の序說における生産と消費の辯證法的關係に據つて、さらに具體化しつゝ、生産物の立場について考察を進めよう。第一に、消費の對象は過去の勞働の生産以外にはあり得ないのであるから、そして生産物は生産の直接の結果であり且生産以外からは生じ得ないのであるから、生産は消費にその素材を提供し又手段をも與へる。さらに消費者は生産物なしには消費者ではなく、又消費することによつて消費者の慾望自體が再生産されるのであるから、生産はまた消費の主體をもつくる。第二に消費は生産を二重に生産する。消費は生産物を消費することによつて生産を完成する。從つて生産物が實現すなはち消費されなければ生産は完成しない。更にまた「消費は、新たなる生産への慾望を、卽ち生産の前提であるところの、生産の觀念的、內面促進的な根據をつくり出すことによつて、生産を生産する。……卽ち消費は、生産の對象を更に主觀的な形態においてつくり出す。慾望なくしては生産はない。しかるに消費は慾望を再生産する。」この簡單なマルクスの說明からも明らかなやうに、生産物の原因たる勞働と、生産物を原因とする消費との間に密接な關係が存在するわけであるが、我々の場合においては、今迄生産は勞働過程としてのみ考へられて來たのであるから、勞働過程卽生産として見た場合の消費との關係を考察しなければならぬ。既に述べたやうに、生ける勞働の絕對的自己完結的活動の舞臺は勞働過程のみであつて、しかも生産物においては勞働過程は消失するのであるから、生産が消費に素材と手段及び消費の主體を作り出すといつても、勞働過程にとつては無意識的な結果にすぎない。從つて一面勞働過程の受動的結果たるにすぎないとはいへ相對的獨立性をもつ消費に對しては、勞働主體の意志の作用は、間接的でしかあり得ない。ところで消費が生産を二重に生産するといふ逆の場合はどう

であらうか。先の意味では消費されなければ生産は生産でなくなり、消費によつて衝動が與へられなければ生産を行ひ得ない。しかるにこのやうな消費の反作用は勞働過程の結果たる生産物の自己運動がもたらすところであるから、そのためには勞働過程は既に行はれてゐなければならないことは云ふ迄もない。且また生産物が消費されようとされまいと、この過程が行はれたといふ事實には變りはない筈である。又消費によつて生産の內的衝動を與へられなくても、勞働過程自體の絕對的形式活動は、その三契機と、そこでの生ける勞働の絕對的主體性とで充分である筈である。それにも拘らず消費されない場合には勞働過程はその意味を失ふといふことはどういふことであらうか。そのためには、生産は單なる主人としての生ける勞働の勞働過程としての意味だけでは最早不充分であり、それ以上の意味をもつところの多樣な過程として考へられなければならないし、またそのやうなものを自己の實存の條件としなければ、勞働過程自體が存在し得ないのであると考へねばならない。すなはち生産物の立場への移行と共に、勞働過程はより具體的に考察されねばならないことを意味する。このやうな要請に伴つて始めて行はれるところに、生産物の立場への移行と共に勞働過程の三契機が生産的勞働及び生産手段へ形態變化を遂げねばならないといふことの積極的意味があるのである。

マルクスは『資本論』第一卷第十四章において、第五章における最も單純な意味での生産的勞働の規定を次のやうに說明してゐる。すなはちこの單純な意味での「生産的勞働の本源的規定は、物質的生産そのものの本性から導き出されるのであつて、」且また「生産的勞働の概念は――活動と有用的效果との――勞働者と勞働生産物との――間の一關係を含む」ものである、と。こゝに云ふところの「物質的生産そのものの本性」とは、第一次的には人間の生命維持のための生活手段の生産であつた。勿論生産の概念はより廣汎な豐かな內容を含むもので

ある、けれどもさしあたり生産的勞働の本源的規定に必要な前提としての生産は、これで充分である。さて生産物の自己運動は、今迄のところ消費を含むにすぎないのであるが、そのことからだけでも一つのことが明らかとなる。生産物が消費されるといふことは、人間の外部に存在してゐた「自然的なもの」が今や人間の手によつて自由に使用され得る對象に轉化したといふことである。生産物の自己運動とは、だからその自然的屬性自體の機械的運動ではなく、即ち使用價値としてそれが消費されるといふことだけではなく、その根源たる自然から解き放たれて、人類にとつてのものとなつたところの自然物質の第二の運動である。かく自然が人間のものとなり人間の意志に從屬するといふことは、生産物にとつても單に人間の外部にあつて人間に對立してゐた自然としての自己からの自由でもある。生産物が消費されてゐるといふことは、生産物が自由な自己運動にあるといふことの事實的表現である。ところで生産物の消費において現實に消費の對象として役立つのは、その使用價値としての使用價値であつて過去の勞働の産物であるといふことではない。自由に消費されるかぎりにおいて、その對象が如何なる勞働過程の産物であるかは消費主體にとつてどうでもよいことである。だから日常の勞働過程への反省は、なほその生産物が消費の對象として不完全である場合に、すなはち自然物質が我々の使用にとつて完全に自由なものとしてではなく、我々に對立し我々の正常な生命活動を阻害する時にしか起り得ないであらう。しかし兎も角この樣な反省が起り得るのは生産物が實は過去における勞働の生産物であり、人間の創造物であるといふことからであつて、使用價値であるといふことからではない。生産物が單に使用價値としてだけの意味しかもたないものならば、消費されない使用價値は人間に無關係なものとして捨てられるにすぎない。それは動物における場合と同じであつて、動物は自然が自己の使用に耐へないときには動物自身が自然からはなれてゆく、すなは

ちそれは常に自然との物質代謝過程にあらねばならないところの生命有機體にとつては自滅を意味する。ところでそれが過去の勞働の生産物であるといふことは、その中には人間勞働が對象化されてゐるといふことであり、從つてまた生産物が消費されないといふことは、對象化された勞働が實現しなかつたことを意味しなければならない。逆に生産物が消費された限り對象化された勞働も同時に消費されたのであり、實現したのである。ところで對象化された勞働は活動しつゝある生ける勞働とはちがつて、勞働者の肉體的制約から解放されて、すなはち生ける勞働としての主體性は否定されて對象の中に固着し融合し、對象的物質として人間によつて自由に使用されうるところものとなつてゐるのである。この一たび對象に融合し去つた勞働が再び自己を對象と區別し生産物と對立するに至るとき、その對立の特定の關係が、生産物との對應において、生ける勞働を生産的勞働たらしめるのである。生産物は自己の根源たる自然から人間勞働に媒介されることによつて自由になつた自然物であり、この自由へ自覺的反省が生産物の立場といふことに外ならないのであるが、そこにおいては既に對象化された勞働は生ける勞働として單に勞働手段、勞働對象を使用する主體的自然力としてではなく、生産物がそれによつて自然の制約から離れて自由に自己運動し得るところの生産物の内部に既にふくまれた原動力としてあらはれる。これが生産的勞働である。だからこのやうなものとしての生産的勞働は、使用價値としての生産物をたゞ消費しさへすればよいといふ單なる消費主體の限界内において日常的には自覺され得るものでなく、たゞ生産物が消費されない場合に勞働が不生産的であつたといふことを通じて、逆に自覺されるにすぎない。しからばこの生産的勞働が生産物に對して有する關係の本源的内容はどうであらうか。それが勞働者と勞働生産物、又は活動とその有用的效果との一關係に外ならない。

消費が生産物を消費する限り、消費は生産を二重に生産する。これを生産物を形成する勞働について云へば、第一に消費主體の慾望を滿足せしめ得る限りにおいて、第二に消費が生産に與へる內的衝動力に從屬する限りにおいて、勞働は消費に對して充全な勞働となるのである。從つて勞働は生ける勞働主體以外から特定の有用的效果を期待されてゐるところの勞働であり、そのやうな期待を充足する限り有用的勞働である。「上衣は一の特殊的な慾望を充す一使用價値である。それを作り出すためには、ある一定の種類の生産的活動が必要である。この活動はその目的、作業樣式、對象、手段、及び結果によつて規定されてゐる。それの有用性が、かやうに、それの生産物の使用價値において、あるひはそれの生産物が一の使用價値であるといふ點において表示される勞働を我々は簡單に有用的勞働と名づける。この觀點のもとでは、勞働はつねにそれの有用的效果に關聯して考察される。」（資本論第一卷第一章長谷部譯一八六頁）有用的勞働は自己の生産物が有效に消費され使用價値たることを實證した限り、すなはち人間によつて自由に使用され得る自然的なものとなつたかぎり、與へられる勞働の特殊規定であるが、そのやうな生産物を創り出した自然力としての方面から見れば、それは生ける勞働に外ならない。凡ゆる勞働は生ける勞働として活動する以外には自然物に形態變化を加へることは出來ないのであるから、有用的勞働も自然的なものを合目的生産物に仕上げるためには生ける勞働として働かなくてはならない。その際生ける勞働にとつて生産物はその直接的結果として、從つて生ける勞働は生産物の原因として一義的な因果關係にとゞまる。しかし有用性はそれのみにとゞまらないのであつて、先の引用句に明らかな如く、生産物の側からして、その使用價値の實現たる消費過程に相應じて有用性が顯現するといふ側面から見れば、即ち生産物の使用價値において自己を表示する勞働としてみれば、それは最早生ける勞働ではなく、生産物と勞働との關係、すなはち勞働がその生産

物の有用的效果との間にもつ關係、從つて單に勞働過程の一義的結果であると云ふだけの制限を越えた生産物の特殊な運動と、生産物において對象化されてゐる勞働との關係とを含むところの生産的勞働として、機能するのであつて、有用的勞働の本質はむしろこのやうな生産的勞働たるところにある。生産的勞働は又物質的生産の目的が第一次的には人間が彼等の生活手段を生産することにあり、從つて人間が飲んだり喰つたり着たりする對象としての使用價値とそこに對象化されてゐる勞働とが問題であるかぎり、單なる生命維持手段の生産における生産的勞働は本源的に有用的勞働と一致するのである。

以上がマルクスの所謂「生産的勞働の本源的規定」であるが、そのためには、先のやうな生産の第一次的特質が前提されねばならないだけであつて、生産物の內容が例へば資本主義における如く、單なる人間の肉體的生活手段以上のものを含むならば、それに照應して生産的勞働自身も單なる有用的勞働といふ範圍を超えたものとならなければならないであらう。そして自己の直接の慾望充足を超えた生産を行ひ得ることこそ、人間を動物から區別する一層高次の創造的な行爲である。マルクスは次のやうに言ふ、「動物は一面的に生産するが、人間は普遍的に生産する。動物はたゞ直接的物質的必要の命令の下に生産するのみであるが、人間は物質的必要からさへ離れて生産し、しかもこれから離れた時に初めて本當に生産する。動物は自分自身を生産するのみであるが、人間は全自然を再生産する。動物の生産物は直接にその物質的肉體に屬するが、人間は自由にその生産物と對立する。動物はたゞそれの屬する種屬の規準と必要に從つてのみ形づくるのであるが、人間はあらゆる種屬の規準に從つて生産することを知つており、如何なる場合にも內在的規準を對象に適合させることを知つてゐる。だから人間は又美の法則に從つて形づくる」（マルクス「經濟學と哲學に關する草稿」――マルエン全集第二十七卷二四八頁）。先に

考察したところでは生産的勞働は生産物の自己運動の過程を通じて始めて自己を實證し得るものであり、勞働が生産的であるか不生産的であるかは、ひたすら一方的に生産物の自己實現如何に依存しそれから受動的に發生するにすぎなかつた。生産物においては自由はあつたが、生産的勞働者は制約されてゐた。しかるにマルクスは上の引用中に「人間が自由に生産物と對立する」ことをもつて、動物から人間を區別してゐる。人間が自由に生産物と對立し得るといふことは如何なることであらうか。マルクスは續いて次のやうにも云つてゐる。「人間はあらゆる種屬の規準に從つて生産することを知つてゐる。」と、これは人間は自分自身のためのみならず他人のためにも生産するといふことであり、しかもそのことを意識的に行ふといふことに外ならない。意識的に行ふといふことは客觀性の認識の上に立つといふことであり、自分自身だけではなく他人の必要をも充し得るところの物質的屬性を對象たる自然物から抽出して、生産物に固定することであり、そのためには自然の法則性に對する客觀的認識が必要であるといふことである。そのやうな客觀的認識の上に立つて、自然の法則性を我ものとして利用することによつて、この法則性の客觀化されたものであるところの生産物の自己運動はすでに生産的勞働によつて意識せられており、その保證の上に生産物の自己運動は始まるのである。「いかなる場合にも、(人間は)內在的規準を對象に適合させることを知つてゐる」といふのはこの意味に外ならない。

だから生産的勞働の意識性は、生ける勞働の意識的能力としての技能とは異なる。後者が意識的であると云つても生ける勞働としての肉體的自然力の範圍內に拘束されてゐるのに對し、前者は生産の更に大なる範圍に及ぶ。自己の個別的身體性を超えた自由な意識である。このことによつて生産的勞働は絕對的に生産物の實現に依存するといふことなく、かへつて生産物の實現を意識的に自己の統制下におくことが出來るのである。そのことは

また、自己の創造物、自己の所有物となつたものとして、生産物に對する生産的勞働者の支配をも意味する。生産的勞働者としての彼の特質は、この支配によつて必然となり、生産物の實現に依存するといふその受動性は逆に彼にとつて偶然的な契機となる。要するに、生産的勞働が「單なる使用價値としての生産物を生産する勞働」としての有用的勞働から自己を區別する點は、このやうな生産的勞働の自覺的意識的活動に外ならないのである。それでは生産的勞働にとつて、この自覺は如何にして可能であるかといふことが次に問題となるであらう（後節參照）。その前に勞働手段及び勞働對象の形態變化としての生産手段について一言しておかう。土地をその根源とする、「自然的なもの」は、富の母たるものであるが、「人間の協力」なしには母たり得ないことは云ふ迄もない。母たり得るためには、それは既に勞働の前におかれてゐなければならない。生産物へ媒介さるべきものとして勞働の前におかれてゐるかぎり、それは單なる自然ではなくして生産物への可能性にある自然である。生産手段とはこのやうな位置にある自然的なものに外ならない。勞働手段、勞働對象はもともと自然的物質として富の母たる土地につながるものであり、人間勞働の前にあるところの媒介さるべき自然として生産手段といふ一個の概念に包括される。（梯明秀著「資本論の辨證法的根據」第二論文參照）

四

次に勞働過程の他の側面たる生産的消費の過程について考察する。

「ある使用價値が生産物として勞働過程から出てくるとき、それ以前の諸勞働過程の生産物たる他の諸使用價値は、生産手段として勞働過程に入りこむ。一方の勞働の生産物たる同じ使用價値が、他方の勞働の生産手段を

形成する。だから諸生産物は、勞働過程の成果であるばかりでなく、同時にそれらの條件でもある。」……「勞働は、それの手段及びそれの對象がすでに生産物である限りでは、生産物を創造するために生産物を消耗する。換言すれば、生産物の生産手段として生産物を消費する。」（資本論第一卷第五章　長谷部譯第二分册七五頁及び八〇頁）かくて勞働過程は必然的に生産的消費過程を伴ふ。

生ける勞働が過程の主人たる勞働過程にあつては、生産手段は勞働手段或びは勞働對象として、それぞれの「概念及び職分に相應しい機能に迄鼓舞されながら、勞働の生活手段として消耗され、その結果は消費者（生ける勞働）とは違つた一生産物としてあらはれる」（同上　七九頁）のであるが、しかしこの生産手段は無目的に消耗されるのではない。「生産手段は、生活手段として個人的消費に入り込んだり、生産手段として新たな勞働過程に入りこんだりすることのできる、新たな諸使用價値――新たな諸生産物――の形成要素として、目的あつて消耗されるのである。」（同上　七九頁）從つて生産物が生産手段として消耗されるといふことのうちには、二つのことが含まれてゐるわけである。始めの場合にあつては、生産手段は勞働過程の實存條件として表はれるのであり、そのことは「過去の勞働のこれらの生産物――（すなはち生産手段）――を使用價値として維持し且實現させるための唯一の手段」（同上　八〇頁）でもある。第二に新たな生産物を生産するために一定の目的のもとに消耗されることによつて、その生産物の物材的形成要素とならなければならない。從つて生産手段は勞働過程の始めに既に目的を荷はされたものとしてあらはれ、過程の終りにおいて目的を生産物の目的として内在化せしめるところのものとしてあらはれねばならない。生産手段が過程の始めに目的を荷なはされてあらはれるといふことは、それが過去の勞働の生産物たる限り消費さるべき必然性にあるものとして消費主體の對象であるが、同時に消費主

體の內的衝動がそれによつて充たされるべき手段としてあちはれるといふことであつて、消費さるべき必然性にあるとはいへ、その直接の衝動は外から與へられる。ところでもともと自然物質たる生産手段は、衝動を與へられたからといつて、自分一人で動き出すわけにはいかない。それは勞働に結びつけられねばならない。かくて消費主體の目的に現實に從屬するものは勞働に外ならない。勞働主體の從屬によつてのみ、目的は生産物に實現されその內在的屬性となる。消費主體の目的が「新たなる生産物の生産」にあるといふことは、彼がその目的の實現によつて消費主體としての自己を維持せんとする限り、更にこの新たなる生産物を消費することによつて、彼の目的は始めて實現されるといふことをふくむ。かくてのみ、消費は生産に對する內的衝動を絶へず再生産し、かつ生産自身が再生産され得るのである。「社會は消費することを止め得ないと共に生産することを止め得ない、」ところで、生産手段の消費過程は同時に新たなる消費對象としての生産物の生産であり、かくて勞働はかゝる消費の再生産を媒介するところの活動として、それは生産的勞働である。このやうに今や生産的勞働は、單に生産物との關係において與へられるだけの勞働の一形態ではなくして、消費するために生産することを止め得ない人類そのものの再生産にとつて不可決の要因となるのであり、またそのやうなものとして機能することが、同時に自分自身を絶えず再生産してゆく條件（消費の衝動）をも創り出すことになるのである。かくて生産的勞働はより一層すゝんだ機能を果すのであつて、今や生産的消費過程の積極的契機をなすものであり、生産的消費過程をして再生産の條件たらしめるものでもある。「必要として慾望として消費はそれ自身生産的活動の內部的一要因ではあるが、しかし生産的活動は實現の出發點であり、從つて實現の支配的要因であつて、全過程が再び續行されてゆく、所の其行爲である。個人は一つの對象を生産しそれの消費によつて、再び自己にもどり來るか、

いまや生産的個人として自分自身を再生産するものとしてもどり來る。消費はかやうに生産の契機として現はれる。」（經濟學批判序論三九四頁）

生産的勞働は勿論現實には生ける勞働としてのみ生産手段を自己の生活手段として消耗するのであつて、その側面においては、過程は生ける勞働自身のためのものにすぎず、彼が他面生産的勞働として再生産の條件をつくり出すといふやうなことは、彼自身にとつてはどうでもよいことであり、いはゞ無意識的な天禀にすぎない。かくて勞働過程自體の中には自己の再生産の主體的條件は存在しないといはねばならない。從つて勞働過程の再生産の必要條件は、生産物が絶えず生産手段として立ち現はれ、從つてまた勞働が絶えず生産的勞働として立ち現はれることと以外にはないのであるが、それはまた生産的消費過程に外ならず勞働過程の外部に横たはるところの條件である。他面、生産手段及び生産的勞働が生産的消費過程の諸契機として機能し得るのは、それが同時に勞働過程の諸契機としてのみ機能し得るからに外ならない。かくて勞働過程と生産的消費過程は相互に不可缺の實存條件となるのである。この兩過程の統一されたものが卽ち生産過程に外ならない。

先に生産的勞働を考察した際には、生ける勞働のそれへの形態變化は、勞働過程の結果でありながら相對的に獨立した生産物の立場のみから與へられたものであり、なほ偶然的でしかなかつた。しかるに生産的消費過程の一契機としての生産的勞働は、生ける勞働の不可缺の實存條件であり、生ける勞働は、反面絶えず生産的勞働としてあらはれることによつてのみ、自己を再生産することが出來るのであるから、生産的勞働たることは生ける勞働の必然的條件でなければならないのであるが、逆に又生産的勞働は、生ける勞働として活動することによつてのみ、自己を生産的勞働として維持することが出來る。この點にこそ生産的勞働の自覺の可能性が生れて來る

のである。すなはち生産的勞働の自覺とは、生産の客觀的法則性への認識を通じて全生産に對して支配者となることに外ならなかつたのであるが、生ける勞働の不斷の實踐的活動を通じて、生産的勞働自體が自己を維持しなければならないところからして、生産的勞働者にとつて客觀的法則性への自覺は一つの必然的强制としてあらはれるのである。（しかるにこの自覺を現實化せしめるものは、實は自己の勞働の生産物の占有といふ事實に外ならないのであるが。）

以上要するに人間と自然との物質代謝過程たる生産は、勞働過程と生産的消費過程といふ對立的二側面の統一的運動過程であつた。またこの運動の矛盾的性質に應じて諸契機の形態變化があらはれたのであるが、それらの諸契機はまだ運動の過程に入らないうちは、それ〴〵勞働力として勞働者の肉體の中に、或は單なる物質的存在としての形態において、個々に分離した生産諸手段として存在する。それらは生産の可能的因子をなし、或は生産の主觀的客觀的諸條件をなすのである。「生産の社會的形態の如何を問はず勞働者と生産手段は常に生産上因子たるを失はぬ。然しそれが相互に分離された狀態について云へば、此等のものはたゞ可能的にのみ生産の因子たるにすぎぬものであつて、苟しくも生産が行はれる爲には兩者は結合されねばならない」（資本論第二卷第一章長谷部譯第五分冊七五頁）この結合は單にその結果として生産が行はれるといふだけではなく、次のやうな結果をもたらすものである。「この結合が行はれる場合の特殊な仕方によつて、社會の構造について諸種の經濟的時代が區別される。」（同上）しからば如何にしてこのことが可能であるか。

勞働力と生産手段とが結合されて現實の生産の因子となるためには、生産過程の二重的性質に照應して、それらは一方勞働過程の諸契機として、他面生産的消費過程の諸契機として、機能しなければならない。從つて勞働

力と生産手段との結合と云ふ場合には、二重の結合の樣式が考へられるであらう。勞働過程においては、諸契機はそれぞれ一個の自然力として機能するのであるから、それらの結合は純粹に技術的であり、一定の技術的基礎の上ではその結合の樣式卽ち技術的構成は與へられてゐる。勞働過程の種々な特殊樣式といふ場合には、それは單に技術構成における差違を云つてゐるにすぎない。技術構成において規定的なものは勞働手段であるが、勞働手段は、例へば機械が封建制度の下では發達しないといふ意味で、經濟發展の測度器、指示器であり得るけれどもそれがもたらす技術的構成が直ちに社會構造の特殊性を規定するとは云へない。更に技術的構成の特殊性は勞働過程における諸契機の活動自體からは生じ得ない。何となれば勞働過程はもともとそれ自體としては、生ける勞働の絕對的主體性の下に行はれる自己完結的個別的過程であり、活動自體の中には自己を再生產する條件を有しないものであるから、技術構成を變化せしむべき內面的動機を缺いてゐるものである。ところでこの再生產の條件をなすものは生產的消費過程であつた。生產的消費過程にあつては、消費主體は生產的勞働を自己の目的に服屬せしめることによつて、自己の素材たる生產手段を合目的的に消費することが出來る。逆に勞働主體にとつて生產手段は自己が順應すべき客觀的對象としてあらはれる。かくて生產的消費過程にあつては、勞働主體と消費主體の結合が生產的勞働と生產手段との結合として物の關係において客觀化されてゐる。または目的的關係を客觀的に表現する。ところで目的は恣意的ではあり得ないのであつて、それは現實の生產に於いては歷史的に與へられてをり、特定の目的を背負つたものとして生產手段は勞働と結合させられるのであるから、如何なる生產手段でもそのやうな目的を達し得るといふものではなく、それは所與の目的に照應した特定の生產手段でなくてはならない。このやうな生產手段を與へるものが卽ち技術である。換言すれば、技術とは生產の目的に照應して、

生産手段の自然科學的機能を變革せしめるところのものであると云ふことが出來るであらう。このやうに生産手段が特定の目的を荷なつて生産過程の中にあらはれ、生産的勞働と對立することこそ、その反面において勞働過程の技術的構成の變化をもたらすものであつて、從つてそれは勞働過程の外部からいはゞ强力的に與へられるのであり、――且そのことは生産物が生産手段としてあらはれることが、勞働過程の再生産の必然的前提條件であり、それなしには勞働過程が不可能であるといふことによつて保證せられてゐる――勞働過程の技術的構成の變化はだから或場合には極めて革命的であり得るのである。このやうな生産手段の變化に應じて、勞働自體も變化しなければ生産的勞働たることを得ない。こゝに生産的勞働の有用的勞働としての性格があるのであるが、この性格が生ける勞働においては技能としてあらはれるのである。ところで生産的勞働がこのやうな順應を示すといふことは何によつて保證されてゐるかといふことが、當然問題になつて來るであらう。生産的勞働が順應しなければ如何に生産手段のみが變革されても、そのやうな生産手段は生産的に消費されるものではない。生産的消費過程自身が行はれ得ないものとなるであらう。次にこの點を問題としよう（註「技術論については武谷三男著「科學と技術について」及び吉岡金市著「農業技術學」參照）

上に述べたやうに、勞働過程に特殊な變革をもたらすものが生産的消費過程に外ならないとすれば、生産的消費過程の特異性をなすものは全生産過程の特異性を規定するものといはねばならない。從つてマルクスの所謂生産の二因子の特殊な結合の仕方とは、生産的勞働と生産手段との結合の特殊な仕方を意味するものでなくてはならないであらう。この特殊な結合が勞働過程を變革し、變革された勞働過程を通じて、生産物の特殊性として自己を打ち出すといふことでなくてはならない。今までのところ、生産的勞働と生産手段との特殊な結合を規定するものは、生産手段がそのために消費されるところの特定の目的としてのみ考へられて來た。この目的に從屬す

ものとして勞働は生産的勞働であり、且つ後者は自己の從屬を生産手段との對應において客觀的に表現したのであつた。このやうに生産的勞働を從屬せしめるところの目的が、單に觀念的表象であつては到底このやうな力をもちうるものではないことは云ふ迄もないであらう。生産的勞働も勞働力の特異な發現である以上、それは人間の肉體にひそんでゐるものであり、從つて生産的勞働を自己に從屬せしめるといふことは、人間の肉體からこのやうな能力を誘ひ出すことであり、そのやうなものとしての目的は、自發的にもせよ强制的にせもよ、人間を動かす力をもつものでなくてはならない。卽ち單に主觀的な目的ではなく主體的な目的でなくてはならないであらう。これまで考察して來たところでは、生産は單に生産一般として特定の社會的形態から抽象されて考へられて來た。このやうな抽象的一面的な考察においては、生産の目的は凡ゆる多樣な社會的內容をすてゝ、生命有機體としての人間の再生産といふ、いはゞ人類生存の第一次的前提のみがその內容となつたのであり、たかだか意識的に道具を使用するといふ點で動物と區別されるにすぎなかつた。從つて生産的勞働は使用價値としての生産物において自己を表現し得るにすぎず、有用的勞働に等しいものであつた。それ以上の豐かな內容はなほ主觀的可能性として與へられるにすぎなかつた。卽ち目的としての生産物と生産的勞働の關係に、單に有用的といふだけではなくより多樣な內容を、單に觀念的にではなく現實的に與へるものは、特定の人と人との關係たる社會關係に外ならない。マルクスの所謂「主體としての社會」に外ならない。

五

こゝにおいて我々はマルクスの有名な言葉を想ひ出さねばならない。

「生産において人間は自然に働きかけるのみでなく、相互に働きかけ合ふ。彼等は共同的活動のために、自分の活動の相互的交換のために一定の方法で結合することなしには生産を行ふことは出來ない。生産を行ふためには人々は一定の關聯及び關係のうちに入り、これらの社會的關聯並びに關係を通じてのみ自然に對する彼等の關係が存在し生産が起る。」（「賃勞働と資本」マルエン全集第四卷六八〇）すなはち本源的には人間と自然との物質代謝過程に外ならないところの生産は、特定の社會的關係を前提としてのみ行はれうるといふのである。この社會關係の基本的なものが生産關係であり、生産に内在的な力として不可缺であることをマルクスは次の如く説明してゐる。「しかしながら分配は生産物の分配である前に先づ（一）生産手段の分配であり次には（二）――これは前者の關係の一歩進んだ規定であるが――各種の生産に向つての社會成員の分配（特定の生産諸關係に諸個人を服屬させること）である。生産物の分配は言ふまでもなく此の生産過程そのものの内部にふくまれて。生産の組成を規定するところの分配の結果である。此の生産のうちに包有される分配から切離して生産を見るのは明かに空虛な抽象であり、同時に一方生産物の分配なるものは本源的に生産の一要因を形づくる所のこの分配と共にひとりでに生ずるのである。」（經濟學批判序説マルエン全集第七卷三九六頁）

しからば如何にして生産關係は生産の内在的モメントとなりうるのであらうか、生産過程の可能的因子たる勞働力生産諸手段は、その所有者の特定の關係を通じてのみ結合され得るものであるが、この關係が生産關係に外ならなかつた。ところで勞働力の所有者たる勞働者は、自己の能力の發現において勞働力の所有者としての自己を實證し、生産諸手段の所有者もその合目的的消費において所有者たる自己を實證する。しかるにこれらの兩因子は結合されることによつてのみ活動し得るのであり、その活動は生産過程に外ならない。だから生産關係は生

産の内部においてのみ現實の人的結合關係となるのであるが、しかし生産過程そのものは勞働力と生産諸手段との二重的機能に外ならないのであるから、このやうな人的關係は物としての二因子の活動を通じてのみ自己を生産の内在的因子たらしめ得ると云はねばならない。このことは如何にして可能であらうか。最早詳しく述べるまでもなく、先に我々が生産の起動力を「消費の慾望」としてのみ擧げたところのものが、こゝに於いては生産手段の所有者と勞働力の所有者との特定の社會關係において主體化されて現はれ、從つて生産的勞働者は、かゝる社會關係において主體化された目的の遂行者としてのみ、或は社會的關係の集中的表現としてのみ、あらはれねばならない。かくて生産的勞働者は本來社會的勞働でありいはゞ「卽自的な個人」としての自己否定卽ち生ける勞働としての主體性の否定によつて自己を社會的普遍的な勞働としてあらはれしめるのである。しかし生産過程の内部において、このやうな生産的勞働に直接的に對應するものは生産手段以外のものではなく、しかも生産の目的はこの物材的要素の上に客觀化され生産物とならねばならないのであるから、生産手段は單に使用價値としての生産物の形成要素ではなく、自己において社會關係を客觀化すべき手段としてあらはれかくて生産物は單に消費——(個人的消費たると生産的消費たるとを問はず)——の素材たるのみならず、社會關係をも自己の屬性としてふくむにいたるのである。

かくて生産的勞働は本源的には物質的生産の本性に相應して、有用的勞働たらねばならないのであるが、また特定の生産關係においてのみ現實的な活動の起動力を得るが故に、生産の内部において社會的關係を集中的に表現するものとしての性格をその獨自的本質とするのである。かくてまた、生産的勞働と生産手段の對應的活動たる生産的消費過程も、本質的には生産の内部における社會的關係の現象形態に外ならない、といふことが出來る

であらう。（剰餘價値學說史第一卷附錄「生産的勞働について」參照）

また生産關係は、このやうに、生産的消費過程において自己の物的表現を得ることによつてのみ、生産の內在的契機たり得るのであり、生産に對して目的決定的に働く起動力として、全生産過程に自己の刻印をおすことが出來るのである。マルクスが費本の生産過程を特徵づけるものとして次の如く云ふのはこのやうな意味からである。「然し勞働過程は價値增殖過程の手段に過ぎない。價値增殖過程はそれ自身としては、本質上剰餘價値の生産換言すれば不拂勞働の對象化の過程である。これは生産過程の全體的性質の特異性を規定するものである。」（直接的生産過程の諸結果二三頁）と、すなはち價値增殖過程が生産を資本の生産過程たらしめるといふのであるが、これは資本の生産的消費過程の資本制的表現にすぎない。しかるに勞働過程に對して直接に社會關係を對立せしめるならばどうであらうか（上林貞二郎著「生産理論」參照）。先に述べた如く、勞働過程の技術的構成の變革は生産的消費過程における再生産の諸條件を通じてのみ、强力的に行はれ得るものであつたのであるが、もし生産的消費過程が單に人と人との關係のみであり、後者が逆に前者において、物的形態において現象するといふことがないならば、勞働過程の變革は生産にとつてまだ內在的とは言へず、外部的な動機によつて變革されるものとなり、恣意的偶然的なものとならざるを得ないであらう。このやうに見てくるならば、生産力の主體なるものが如何なるものであるかといふことは今や說明を要しないであらう。このことは勿論周知のことであるにもかゝはらず、之を更に再檢討しなければならない所以は、生産力と生産關係との對立の側面のみが强調せられて、その統一の契機が無視せられる結果、生産關係の能動性が强調せられる場合にも生産にとつて單に外部的偶然的作用たるにとゞまり、生産に內在するところの物質力としての把握が充分でないやうに思はれるからである。その一つ

の例は（上林氏前掲書）生産力の構成要素を勞働力と生産手段として正しく把握しながら、その發現を生ける勞働、勞働手段、勞働對象としての側面においてのみとらへる場合であるが、そのときには生産關係が主體的に生産力の内在的契機たる餘地を殘さず、そのため生産關係の反作用も、言葉の上では内在的といはれながらも、事實上外部的なものにとゞまり、機械論的な生産力自然成長説に尙生き延びる餘地を與へざるを得ないのである。他方生産を單に物の過程としてのみとらへ、從つてそこに人と人との社會的結合たる生産關係が主體として内在的推進力として作用してゐる面を見逃がし、卽ち生産力をも生産關係をも同じ次元の物質力として把握したために生産の主體的推進力を他にもとめざるを得ない結果となり、遂に觀念的人間類型に到達した例を、我々は大塚史學に見るのである。

要するに生産力の發現は生産過程に外ならず、從つて生産力を運動においてとらへることは、生産過程の内的構造を明かにすることでなければならない。しかるにそのことは必然的に生産過程の運動の起動力たる主體としての社會的生産關係に到達せざるを得なかつたのであり、かくて生産力そのものの内的起動力は生産關係に之を求めざるを得ないのである。從つて又生産力の發展が問題になる時、それはかへつて生産關係自體の問題でなければならないのであり、生産力發展の内的起動力たるべき生産關係の主體的把握でなければならないのである。（完）